

砂地のきのこたち

山本 充弘

耳寄りな話

南房総に居を構えて5年、海は身近な存在でよく出かける。砂地にもきのこは生えるという話は聞いているが、今までついぞお目にかかったことはない。そんな中、車ならそれほど苦にならない距離に、コナガエノアカカゴタケが出ており、うまくすればスナヤマチャワントケも見つかるかもしれない、との耳寄りな情報を入手した。

前日の夜半から降り出した雨も朝の8時にはあがり、西の空に白い富士山の頂が見える。12月5日、富津市の新舞子海岸へ向かう。目的地の海岸に到着する頃には、空も晴れあがり、風もなく遠方の小高い丘の上に東京湾観音の上半身が白く浮き上がっている。気持ちいい小春日和。海をボーッと眺めているにはもってこいの日である。しかし、今日は、砂地に生えるきのこ探索が目的だ。

コナガエノアカカゴタケとの出会い

15分ほど海岸を歩いたが、きのこの「き」の字も見つからない。この海岸は、砂浜が1.5km近く続いている。さてどうしたものかと考えながら、波打ち際からの距離を少しずつして歩を進め、ふと見ると4mほど先に赤みを帯びたきのこらしきものが目に入る。近づいてみると、これがまぎれもなく目的のコナガエノアカカゴタケ（スッポンタケ科ツマミタケ属）ではないか。「やったぞ！」と思わず叫びたくなる一瞬である。結局この日にコナガエノアカカゴタケに出会ったのはこの1本だけであったので、これを見逃していたら

この日の探索も収穫半分になるところであった。それにしても、このきのこは色彩に富んでいる。漆黒の地に赤みを帯びた縄目が巻きつく様は、何とも豪華である。頭部を支える托も白地がほんのりと赤みを帯びているところが上品だ。



写真1 コナガエノアカカゴタケ



写真2 袋状のツボと菌糸束が見られる

スナジクスタケ

この後は、周辺に茶色いきのこがあちこちに見つかる。1.5 cm ぐらいの円錐型のものから4 cm ぐらいの饅頭型のものまでカサの形や色は微妙に異なり、皺のあるもの、平滑のもの、鱗片を着けているものなど変化に富んでいる。ヒダの形はみな似ており、色は褐色から黒褐色である。柄は、短く同じ太さのものから、長くて下部が棍棒状に膨らんでいるものまでいろいろだ。



写真3 大きさやカサの状態に変化が見られる

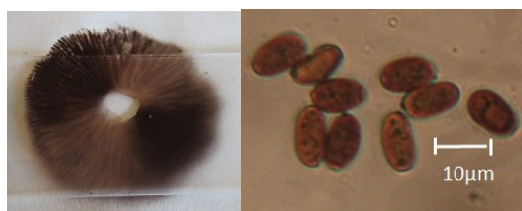


写真4 胞子紋と胞子

しかし、家に帰ってから胞子紋を取るとみな黒褐色であり、顕微鏡で胞子を観察すると全て同じような形をしている。色は透けて見えない濃い黒褐色のものとやや薄い褐色で透けて黒点が観察されるものがある。これらのきのこは、ナヨタケ科ナヨタケ属のスナジクスタケが該当しそうである。もしかすると

ナヨタケ属で種の異なるものも混じっているかもしれない。

スナヤマチャワンタケ

そして、スナヤマチャワンタケ（チャワンタケ科チャワンタケ属）もたくさん見つけることができた。最初に見つけたものは、直径4 cm ほどのこんもりと砂が盛り上がった中心に口を開けたもので、まるでホコリタケの口を開いたような形である。チャワンと言うよりは壺である。砂地で飛び砂が入るのを避ける構造なのだろう。続いて口のしっかり開いて縁部が波打っている茶碗型のもの、これは育った親なのだろう。このタイプで径が10 cm もありそうなものまで見ることができた。ここでふと疑問が生じた。口を開いた茶碗にも砂がほとんど入っていない。少し強い風が吹けば、飛び砂が入ってしまいそうなものだが。径1 cm ほどのしっかり口を開けている赤ちゃんの茶碗も見つけたが、これにも砂はほとんど入っていない。



写真5 スナヤマチャワンタケ

そして、径が4cmほどの萎びてしまったものには、しっかり砂が入っている。スナヤマチャワンタケが生きている時（胞子を飛ばし終えるまで）には、砂が中に入るのを防ぐ何らかの方策が講じられているのではないかと疑いたくなる。



写真6 砂の入った個体



写真7 上：胞子嚢、下：胞子

スナジコザラミノシメジ?

長靴を履いて砂地を歩くのは、結構体力を消耗する。そろそろ今日は引き上げ時と引き返していくと、径7cmほどの本日最大の饅頭

型のカサを持ったきのこが2本並んで生えている。褐色のやや波打ったカサには少々光沢があり、クサウラベニタケに似ている。ヒダは密でうすく赤み（写真ではうすい褐色）を帯びている。柄は、暗赤褐色で繊維状、上部は色が薄くなり赤色が明瞭になる。下部に行くにしたがって膨らみ、その後細くなりつつ沢山の砂を付着して砂の中に長く伸びている。



写真8 スナジコザラミノシメジ?

もしこのきのこがクサウラベニタケを含むイッポンシメジ科ならば、胞子紋は淡紅色で、顕微鏡で胞子を見れば角形かつ非アミロイドであることが確認できるはずだ。家に帰って、早速胞子紋を取ると、何と白色である。胞子は楕円形で、メルツァー液を添加するとアミロイドで黒く染まり、表面に小疣が沢山あるように見える。

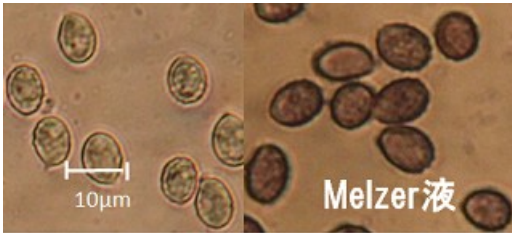


写真9 上：孢子紋、下：孢子

「北陸きのこ図鑑」には、キシメジ科ザラミノシメジ属のスナジコザラミノシメジ(奈良仮) *Melanoleuca* sp. というきのこが紹介されている。カサの径は2.5-5.5 cm、柄の色はカサより淡い、という点を除けばあとは紹介されているきのこにぴったり一致する。コウボウムギやハマニンニクなどの株間に散生し、地中の枯れた地下茎や枯葉と偽根で連結しているとの説明がなされている。

野兔の糞とハチスタケ

ところで、あわよくばケシボウズタケの仲間も見つけれないものかと欲を出して、ウサギの糞状のものを探した。するとウサギの糞が砂地のあちこちに大量にある。この中に1つくらいは真ん中に穴の開いたものはないかと、目を近づけて観察したが、いずれも見まがうことなきウサギの糞であった。そしてケシボウズタケの仲間は、ついに見つけることができなかった。



写真10 浜辺には沢山の野兔の糞

ウサギの糞に目を近づけたことで、糞の表面に径が1-2mmの小さなきのこ状のものが生えていることに気がついた。接写して拡大してみるとカサの表面にゴマ粒のような黒い点が一定の間隔で散りばめられている。これは、ウサギの糞に生える子嚢菌のクロサイワイタケ科ポドソルダリア (*Podosordaria*) 属のハチスタケである。言われてみれば蜂の巣のようにも見える。



写真11 ハチスタケ

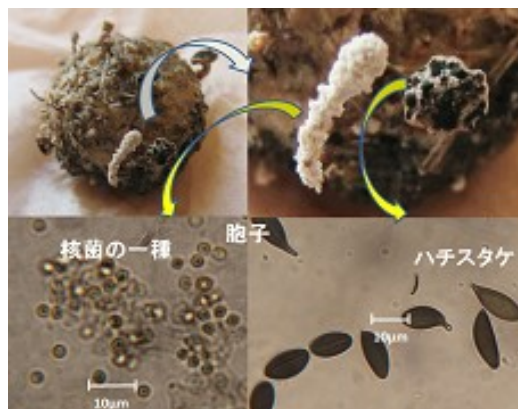


写真12 野兎の糞を持ち帰り、観察を継続。19日にハチスタケは、孢子嚢の先端が破裂し、孢子を吹きだしていた。また、冬虫夏草に似た白い核菌の間が生えてきた。

しかし、図鑑に紹介されている名前の漢字が「蓮茸」となっている。辞書で「ハチス」を調べてみると、ハスの実がついた状態が蜂の巣のように見えることから、ハスの別名、と解説されている。また、花托の形状から「はちす」が古名で、「はす」へ転訛したとの説明も見られる。しつこく漢和辞典で「蓮」を引くと、音読みの欄に「レン」とあり、訓読みの欄は空白、字義の欄に「はす、はちす」とある。このきのこについては、千葉菌類談話会通信第28号(2012年3月)に、吹春・寶田氏の執筆による「養生菌の話」に詳しく紹介されており、浅井郁夫氏の写真も載せられている。あえて重複を覚悟でもう少し説明すると、このきのこは、原撰祐氏によって1915年に発見されたもので、和名については、紆余曲折を経た結果ハチスタケと命名された。明らかに形状から「はちす」を選んだと思われる。更に、学名は、*Poronia jugoyasan* Hara と紹介されている。この種小名の *jugoyasan* は、「十五夜さん」と読める。このきのこはウサギの糞に生えるので、ウサギに因んで学名に付けたようだ。何と遊び心を持った命名であることか。童謡の「うさぎ う

さぎ なに見てはねる 十五夜お月さま 見てはねる」が思い出されてほのぼのとする。ところで、野兎は、何故砂浜に大量に糞をするのだろうか。海を見ながらリラックスして脱糞しているのだろうか。ときには十五夜を見ながら。

砂地のきのこへのアプローチ

冬場の砂地にこんなきのこが生えているのには驚かされたが、広い浜辺でもきのこの生えている場所は、かなり限られる。波打ち際から砂浜を経て草地に到る地形で、草の種類もコウボウムギやハマニンニクが生える場所が一つの条件になるかもしれない。栄養の乏しい砂地で菌糸が増え、子実体を形成するのは大変な困難を伴うようにも思える。外生菌根菌として共生するには、地形的に樹木から遠く離れすぎているので腐生菌であろうが、スナジコザラミノシメジの説明に見られるように、コウボウムギやハマニンニク由来の枯死した有機物から栄養を吸収しているとしても、数メートル離れた地には豊富な有機物がある。にもかかわらず、有機物が僅かしかない砂地を選んでにはそれなりの理由があるのだろう。通常、有機物の豊富な土壌の中では多様な細菌や菌類が生息しており、激しい生き残りの競争が行われている。動物の世界も植物の世界もこの激しい競争を避けて、より生きづらい所を選んでいる種がいる。砂地のきのこたちも同様の選択をしているのだろうか。きのここというと山というイメージがあり、砂地のきのこについての情報は限られている。半島として海に囲まれた千葉県は、海辺の砂地のきのこへのアプローチをするにはもってこいの場所ではないだろうか。

